

事務職員の授業参加について——なんばしよつと?——

鏡池 昌俊

(福岡工業大学短期大学部 短大事務室・事務長)

一、はじめに

入学から卒業までの二年間、およびその後社会人として生活していくための基礎教育を行うことを目的として一九九七年度に「教養ゼミナール」を導入した。一年次に、「教養ゼミナールⅠ」、二年次に「教養ゼミナールⅡ」を必修科目として配当し、全員の履修を義務づけている。この科目は、教員と学生の間意思疎通を密にすると同時に、社会の構成員として必要な常識力、コミュニケーション力や道徳心・公共心など、人間力を磨くとともに充実した学生生活を送ることができるよう学生をサポートするための授業である。

この授業に二〇〇九年四月から学生支援の一環として事務職員が参加しているので、本稿でその概要を述べる。

二、多様化した学生への対応

本学は、入学した学生へ「顔の見える丁寧な教育」を行うために、独自に開発した「出欠管理システム」を二〇〇〇年度に導入した。これは、学生の顔写真や各種の個人情報を始め、授業への出席状況、履修・成績・単位の取得状況などが登録されており、多欠席者や履修単位の少ない学生を早期に把握し、指導することを目的に開発したシステムである。事務職員も教員とともにその情報を共有し、指導に活かしている。

一八歳人口の減少に伴い、また入試方法の多様化により「学力の低下」のみならず「学習意欲の低下」、「学習目標を見いだせない」といった問題を抱える学生が以前に比べ増加の傾向にある。特に、コミュニケーション力に幾分の問題を抱えた学生、そのままにしておく、「引きこもり（不登校）」に至ってしまうような学生への対応は従前にもまして重要になってきていると考えている。そこで、学生の友達付き合いほか、学習面や進路面などの悩み相談窓口として短大生専用の相談室「フィットルーム」を二〇〇九年度に開設した。ここでは、教職員の協同の下、必要に応じて保護者と連携を取りながら面談や指導を行っている。

このフィットルームは、学生が予約を入れて訪問するカウンセリング室とは異なり、教職員が学生を呼び込むスタイルをとっている。

※出欠管理システム

タイムリーな学生指導を行うことを目的として開発した本学独自のシステム

短大インターネット環境で運用しており、毎日、出欠データが更新される。短大内であれば教職員はいつでも自由に最新の出席情報と学習情報を閲覧できる。

三、事務職員の役割

事務部門の基本的な役割として、教学部門が教育・研究の目的を達成できるように支援することが挙げられるが、教育の一翼を担い、教員とは違う立場・視点から学生の生活面などの指導や悩みなどについて助言することも大変重要だと考えている。学校教育においては、教員と事務職員は車の両輪に例えることができ、どちらかが欠けても機能不全に陥ってしまう。しかし、上手く機能すれば相乗効果を生むことになる。

本学園は、一九九八年度からマスタープラン（中期経営計画）を策定し、学園全体の経営の柱に位置付けている。始めに五カ年計画を立て、三年ごとに見直しを行い、その結果を次の計画へ繋げている。その中で、「For all the students」すべての学生・生徒のために「」を全ての教職員が行う教育・研究および社会貢献の諸活動における共通の判断基準としている。そのマスタープランの下、単年度行動計画であるアクションプログラムを作成し、実施する体制をとっている。「教養ゼミナールⅠ・Ⅱ」への事務職員参加は、短大事務室のアクションプログラムの中でも重要な取り組みとして掲げている。

四、事務職員参加に至った経緯

本学は、FD/SD活動として全教職員参加による研修（教育方法研究会）を実施している。ここ数年、この研修会で多様化する学生への対応が論じられており、「学力の低下」、「学習意欲の低下」といった問題などに対しては、考え得る対策を逐次取ってきた。しかし、学生のメンタルな部分に関しては、ある程度症状が現れてからカウンセリング室（併設大学と共用）へ相談し、臨床心理士にカウンセリングをお願いするのが実状であった。このような学生が増える傾向にあるとの認識に立ち、その対応として早期に学生の「変調」に気付き、カウンセリングに繋げることが有効との意見が事務職員から出た。そのためには、教員だけでなく全教職員が学生を知ることが肝要であり、少数クラスの「教養ゼミナール」が学生を理解するには最適の場との結論に達し、事務職員の授業への参加を学科会議に申し入れた。

本学は、学生のためになることであれば「即実行することができた。以前なら、教育に関して事務職員が直接タッチすることに、教員側からの拒否反応も想定されたかも

しれないが、「学生のために」との思いを全教職員が共有している現在、何ら支障はなかった。

五、取り組みのねらい

従来行ってきた取り組みは学生の症状が顕在化してからの対処療法的な面であったのに対し、本取り組みはその段階に至る前に予兆を掴み不安感を払拭するなど、早期対応に繋げる「予防的観点に立った効果」をねらっている。勿論、教養ゼミナールを担当している教員や事務職員はカウンセリングの専門家ではないが、学生の顔を見て、会話することにより微妙な変化を感じ取ることができる。また、ゼミ担当の職員ということで学生が親近感を持ち、いつでも、どこでも「なんばしよっと？」と言う声掛けに、気軽に応じ、返事や相談をする気にさせることがねらいである。

事務職員は、窓口に来る学生や顔見知り以外の学生の情報は「出欠管理システム」や「学生カルテ」など書類や画面および教員から口頭で得ていたが、授業に参加して学生と接することにより文字などではなかなか伝わらない情報を得ることができる。

※学生カルテ



授業や個人面談などで入手した学生の学習・生活面の情報を教職員がWeb画面上に随時書き込んで共有できるようにしたもの（学内ツイッター）

六、取り組みの実施状況

教養ゼミナールを受け持つ教員（担任）は一六名であり、各担任が各学年一〇名〜一四名の学生を受け持っている。二年次生は毎水曜日三限目の前半四〇分、一年次生は後半四〇分および四限目に九〇分の授業が設定されている。

四限目の九〇分は、学長講話、外部講師の講演、キャリア教育、編入学支援などのプログラムを組んでおり、事務職員が参加するのは、三限目の前・後半になる。

授業は少人数で実施されるため、各教員の研究室で和気藹々とした雰囲気の中で行われている。

このアットホーム的な雰

囲気の中で行われる授業は、学生がリラックスして参加しているため、学生の友達関係をほじめ、学生の思いや考え、現在の状況が大変把握し易い環境となっている。

授業の中での事務職員の役割は、学生の把握に主眼を置いているため、特に能動的な動きをしていない。しかし、授業に参加する準備として、担当ゼミの学生の氏名と顔を覚えることと、彼らの発信する信号をキャッチするために、自分の受信スイッチを入れて臨むことが必要である。

「ならばしよつと?」

ここで得られた学生の悩みや問題は、教員とともに協力して解決にあたることになる。

この授業は、学生個々の人間力の向上を目指すことを達成目標としている。時折話す事務職員の経験談や知識、考えは学生の見聞を広げる一端を担っていると思っている。

七、効果

授業への事務職員参加による効果として以下のことが考えられる。

・問題を抱える学生の増加により、担任が特定の学生の指導に時間を費やし、他の学生への対応が遅れがちになる

のを防ぐ。

・事務職員が学生を指導するにあたって、学生の状況をよく把握した状態でできる。

・教員とは異なった視点（教える側ではなく、教えられる側である学生に近い立場）からの教員への支援が可能となる。

・女子学生の在籍割合が四割強であるにも拘わらず教養ゼミナール担当の女性教員は一名であり、女性事務職員の授業参加は女性ならではの「気づき」ができる。

・女性事務職員が担当することにより女子学生に相談しやすい環境を提供できる。

・担任と協力して保護者への連絡を行うことで、学生だけでなく、保護者との関係も近くなる。

より効果を高めるために重要なことは、日頃から積極的に声掛けを行うことであり、学生に「気に掛けてくれる」との意識を持たせ、教職員との信頼関係を築き上げることである。

八、対応事例

研究室で行われる授業に参加することは、体も心も学生達の近くにいることになる。表情や言葉、醸し出す雰囲気

から「気になる学生」がいた場合は、授業終了後に担当教員と相談して、学生への声掛けを行う。初回は、殆ど何気ない会話で終わることが多いが、それを続けるうちに自分から悩みを打ち明けたり、相談したいことがあると訪ねてくるようになる。

【事例】進路も決まり落ち着いて二年後期を過ごせるはずなのに、「得体の知れない不安」に襲われて、食欲も意欲も失せ、不眠になり涙が止まらなくなったと相談を受けた。面談を重ねるうちにこの苦しい状況から抜け出したいとの思いを確認し、本人も望んだのでカウンセリング室に繋いだ。その後、保護者とも話し合い、隔週で臨床心理士と事務職員が交互に面談を行うことを決めた。臨床心理士と連携を取り、指導の方向性を同じにした対応を半年間続けた結果、「不安」を抱えながらも自分と向き合い、自分を受け入れて卒業することができた。

これは、私達が目指す「生活の中でのカウンセリング」なんばしよつと？」が、かなり順調に行えた事例である。

九、問題点

二〇〇九年四月から開始し、一年半が経過したが、いく

つかの問題が出ている。

まず、事務職員の授業参加が同じゼミに対して毎回できないこと。短大事務室の教務担当事務職員六名に対し「教養ゼミナール」は一六クラスあるため、毎回、全てのゼミへ参加ができない。

次に、ゼミへ参加している時間帯は事務室内の職員が少なくなり、繁忙期には時として事務室が無人状態になることがあり、学生サービスに支障をきたすことがあったので、制限をしなければならなかった。

毎回、参加できなかった分の関係構築は、積極的な日常の声掛けで取り戻したいと考えている。

十、おわりに

今後を増やしていくと思われる多様化した学生への対応として、早期識別・対応は大変重要なことと考えている。病気などが疑われる場合、カウンセリング室や専門医、その他の専門機関に繋げることができるのは、保護者と学生生活の場に関われる私達教職員である。

学生が病気の入り口で佇んでいる時、誰かが引き止めることができるなら、話を聞いてやれるなら、その後の展開は変わってくるのではないかと考えている。その誰かにな

れるようにと願いながら、授業に参加して関係作りを行っており、教職員一体となったこの取り組みを引き続き行い、実効性あるものにしていきたい。

また、この「教養ゼミナール」への事務職員の参加は授業の一環であると同時にFD/SDの場とも捉えている。教員はこれまで主に専門科目の授業見学を実施し、授業内容、授業の進め方など、学生の指導方法の改善に努めてきたが、こと「教養ゼミナール」に関しては、全教員が同一时限に授業を受け持っているために他ゼミの授業を見学することができず改善に繋がりにくい面もあったと思われる。

今回、事務職員が複数の教員の授業に参加し、「気づき」を各教員に伝えることにより授業改善への参考になればと期待している。

新たな取り組みをスタートさせたことは一歩前進したことであり、PDCAマネジメントサイクルの手法を取り入れ、その評価を行い、さらに内容の充実を図っていかねればならないと考えている。

多様な学生への取り組みは、一朝一夕では解決できるような問題ではなく、多くの時間と労力を費やすが、本学の取り組みが少しでも参考になれば幸いである。

※サブタイトルの「なんばしよつと？」とは、博多弁で「何をしているの？」と言った意味

この言葉は「呼び掛ける」・「注意する」・「叱る」時など、多くの場面で使われる。